画図新六歌仙

熱田宮寸

清庭火の湊にとゝくや明し此宮　紙手
薫染たとのうりし床夫堂充　有節
見踪とはなしに禁をたれつゝく　秀外
手もさへられぬ紙の濂ほし　手
祝ひ日も先ゆくましの月れ好　節
鉄くちつきみまよふ諸の巣　外

唯ひとつなりし蕃柑（ザボン）のこのみ付　手
孫蜜のなる種乃たしまり　節
男よりちやう智恵つく女の子　外
欲乃世変をいの新めされ　手
すゝけ丈枚は伽藍乃下縁に　節
蚤れ飛ふさへよくこゆる自　外
いま来ても旋投士む帰る船　手
去て徐菜屑乃もゆる露風　節

出侬まく乃うこれをこのもれ梅若に　外
自物かまをぬ翁の灸好き　手
上髪のまゝさかひも花乃うち　節
栗乃名給て妹も婿夫る　外
番さんく素人大工乃喜かせき　節
さこのはれし押てこまる夢お　手
高扉いろく来徐日は雨もなし　外
きこしへて掃ふく桂心の墓　節

菜汀の奥ゆくさくみる行掛ひ　手
逢さへ失迄はそこちこの兒　外
類嵩しもちさぬまての夜まくら　節
路ハ菱を喰ひさうれ有　手
うかくと露のゆふれもちて過　外
ちやらく出代侎念を落らく　節
宰領の分宵ほしかる月ひとよ　手
ゆふしかまへ代ちち上侎潮　外

振子乃皮を切くまくされる　節
呪りのくせ木喧嘩はたしむ　手
母親うしと経かふ録ハ人うやり　外
みしからそ笑くをしま郷な　節
ち義をの一もれよたる侎猫ケ洞　手
其恋うし降る雨のあるこみ　外

根は汐のかよふくちきし宝北山　有節
月をうし結よ菜くふ鷺　秀外
戻り荷よ附添ふるあれ縄ぬけて　欲手
をちく編佛の腰か支るまり　節
きけ川のをたしきうりよ吹ぬ風　外
杉くれし連をゆつくりと結　手

秋の花に鳥乃まく係古阿弥陀　節
早ゆしたとれ経ぬゝ南戸樋　外
若よ病くる眼ゑかしまうけ　手
古市添鳴りしものひらねなり　節
秋くるひ墨をぬりる諸生説飛　外
さみくか識乃東ふいとゝ贅　手
月らむき廿六枚れ雨の杉やゝ　節
蕪乃あゆく嵐居か八郎　外

女子等もきひなき迄る錦稗　手

直ぬ世柄了通りふえ出次　節

老たる小又るくひなき崖造り　外

能の宵かゝ張紙壽の彩色　手

飯詢を喰なから世俗今条　外

横ゐら用の多り軟歪柳　節

黒目よ里十しハ以や右座くもり　手

小理屈以くは逃く来ぬ悲　外

木こりつく炭火ふくきむこ不れ歴　節

牛並なほ仏功徳めて多さき　手

神楽庭の禰宜よは過了さ叩撲　外

よく尺く浪へまいに割舟　節

風邪引てはくもられしは松の声　手

薮猿浴く躬飛得ぬ　外

法夫月よ庵落の読家探おゆし　節

つん法く躍ならいに小や傣　手

やう〳〵と滝口となる国隠居　外
粉にしく杉菜と折まぜる引　節
三つの玉れちくの小油揚焚くらん　手
洗足袋くの紫かしさまる　外
蓑花をかりて茶浪唐ころし　節
尾てよき坊に橋のある墓　手

山菜をや田かし僕くれく斜者　秀外
裏の志ぬりに掃やされ茎　我手
欲ゆゝのむ市の仮小屋ゆくくわて　有節
賞あせね八風呂も焚ま逆に　外
七夕のくちは手つくね月の入　手
繁て抱ほ御急やいしふし　節

調乃緩く雨の遠さかり　外
そゝき尼なりしハもてに下寺　手
燃あくの乾栄に霧羽れ手を休め　節
ちハかゝ迄芥の田うこ耳なりつ　外
一里出に初糸宮乃にゝ逆ひ　手
早下自慢夫に医者のもてなし　節
名月に餘らぬ次扇の背をさまし　外
さかりあひして通学はちる　手

矣れそまてく鶉をひやまつ秋の風　節
遊んで飯へに彦根かいをれ　外
横枝乃挑灯作る夫宵乃花　手
にゝのまへきさ大さゝからぬむ為る　節
許の来にみひよ傾く馬の鬣　手
残余つるすいえやね纏つれ　外
近江にゝらちて掃出に葬れあと　節
拙いちりたちつに嵯峨宗やう　手

堀の中の池うしちや居るかいつむり　外
たらまぬ役ふ足ゑ掛たれ　節
兜ふく片煮え歩行小豆飯　手
帝主乃多賀帯に封きる　外
菜餅添も巴の白はふ女八表向　節
月花の末数ふ志乃紀中ふ遠ち　手
菊作り勝をたく吹く大欠伸　外
犬の脊つまふ吹とくたくさむ　節

志ちくもと権現わかし像乃入　手
家名は缺へと志らぬちうつき　外
童蓋れ出添来て緒を崩し合　節
毛ゆへ乃さゝさ小底る志らく　手
鳩乃濡る様うしぬそこ去て苍茫く　外
晒布れ印ふ友のちよつよ添　節

旹天保十年歳次
己亥晩冬上梓
太清屋藏

己亥冬

熱田新三歌僊

尾張　古渡居